東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2025
「伸びやかに生きる　～大学は知の宝庫～」

第 8 回　12/19（金）13:30～15:00　報告
「ラヴェルのオペラ『子どもと呪文』」
講師　菅野 道雄（本学教授）　　於：図書館大セミナー室

＊◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆＊

令和 7 年度第 8 回公開講座が 12 月 19 日(金)に開催されました。

今回の講師である菅野先生は、クラシック音楽を話題にした講座で、毎年アンカーを務めています。昨年はチャイコフスキーのバレエ「くるみ割り人形」が取り上げられましたが、今年度のテーマが「伸びやかに生きる」ということなので、子どもの成長をめぐる作品を取り上げることになりました。

今年は、生誕 150 年のアニバーサリーを迎えたフランスの作曲家モーリス・ラヴェルの作品をお楽しみいただきます。

ラヴェル(1875-1937)は、スペイン国境に近いシブールに生まれましたが、生まれてすぐパリに移りその後死ぬまでパリを拠点に活動しました。

「ボレロ」「ピアノ協奏曲」やムソルグスキーの「展覧会の絵」のオーケストラ編曲など管弦楽の名曲では「オーケストラの魔術師」といわれ、また多くのピアノ独奏曲でもよく知られています。そんなラヴェルにはオペラが 2 曲あります。30 代の時に書いた「スペインの時」と、1925 年に初演された「子どもと呪文」です。いずれも 1 時間ほどの短いものなので 2 つを 1 晩で演奏することもよくあります。

「2 部から成るファンタジー・リリック」という副題の付いた「子どもと呪文」は、女流作家コレット(1873-1954)が作ったバレエ台本がもとになっています。パリ・オペラ座の支配人だったジャック・ルーシェに紹介されたラヴェルは、コレットと相談しながらおよそ 5 年の歳月をかけてオペラとして完成しました。

作品はラヴェルらしい多種多様な技法が取り入れられていて、不思議な魔法の世界を描き出しています。『新グローヴ オペラ事典』は「ラヴェルは本作にはプッチーニあり、モンテヴェルディあり、アメリカのミュージカルあり、全てが含まれていると語った。このことはパリ・オペラ座で 2 人の黒人にラグタイムを歌わせるというアイディアに夢中になっていたという彼の以前の告白と相まって、この活気溢れる楽しい作品の核心に深く真剣な感情のあることを気づかせない要因になっている。」と評しています。

講座で鑑賞した演奏・演技はサー・サイモン・ラトル指揮のもとでロンドン・フィルハーモニー管弦楽団の 1987 年のバージョンでした。シンシア・ビュシャン氏はメゾソプラノ＝子どもの役、ハロライン・ブラックウェル氏はソプラノ＝お姫様の役、そしてフィオナ・キム氏はアルト＝母親、白猫の役を演じています。舞台装置はモーリス・センダック氏により

ます。これだけでも豪華な感じでした。
　あらすじは以下の通りです。

　舞台はフランスのノルマンディー地方の田舎の家の一室と庭。
　静かな短い序奏によって幕が上がる。6 歳ないし 7 歳になる子どもは勉強するようにと母親から言われて宿題を始めたものの、すぐに飽きてしまい「宿題なんかしたくない、散歩に行きたい。お菓子を食べてしまいたい」と言い出し不平不満を漏らす。そこに母親がおやつを持って入って来るが、宿題が全く進んでいないことに気付いて子どもを叱りつけ、罰として砂糖抜きの紅茶とバターの塗っていないパンを置いて「反省しなさい」と言って出て行く。
　腹を立て、癇癪を起こした子どもは「僕はとっても意地悪なんだ」と言ってポットやカップを叩き割り、籠の中にいるペットのリスをペン先で突いたり、雄猫の尻尾を引っ張ったりと八つ当たりを始める。火掻き棒で暖炉の灰を掻き回したり、壁紙を破いたり、大時計の振り子にぶら下がって外し、ノートや本を破って「僕は意地悪で自由!」と叫ぶ。
　いたずらに飽き、疲れた子どもはソファーに座ろうとすると、ソファーが突然動きだし、子どもは驚く。ソファーは安楽椅子に「ダンスのお相手をどうぞ」と声を掛け、「これであの乱暴な子どもをやっと追い払いました」と歌いながらダンスを踊り始め、他の道具たちもこれに加わり、子どもから受けた苦しみを歌う。子どもは何が起こったのか分からず、この様子をただ驚きの目で見つめるだけである。続いて大時計が鳴りだし、「もう鳴り止まない、何時なのかもわからない、あの子に振り子を外されてしまった!」と歌いながら歩き始め、子どものためにこの歳でこんな鳴り方をする破目になった大時計は自らを嘆く。英語で喋るウェッジウッド製のポットはボクサーのようにして子どもを脅し、中国製のカップは尖った指で子どもを脅す。「僕のきれいな中国茶碗が」と言って呆然とする子ども。そして大切な茶碗を壊したことを後悔する。
　陽が沈み、子どもが暖炉に近づくと「いい子には暖めてあげるけど、悪い子には焼き殺すよ」と火が子どもを追いかけ回し、そして灰と戯れる。「こわいよ」と子どもは呟くと、今度は羊飼いの男女が羊や犬を連れて現れ、「この意地悪な子が壁紙を破ったおかげで、私たちの愛が引き裂かれた」と嘆いて去って行く。さらに破った本からはおとぎ話のお姫様が現れ、「あの娘だ」と驚く子どもに向かって、「昨日あなたが夢の中で叫んでいたおとぎ話のお姫様よ。あなたのせいで呪いをかけられてしまった」と嘆き悲しみ、眠りと夜の世界へと姿を消す。子どもは最後を知ろうと破けて散った本からその部分を捜そうとするが教科書ばかりで見つからない。
　教科書を踏みつけるとそこから小さな老人が現れ、立て続けに算数の文章問題を出して支離滅裂に歌い、数字たちも表れて子どもをダンスに誘って引きずり込む。子どもは目を回して倒れ、同時に老人と数字たちは姿を消す。月が昇り、人間と同じ大きさの黒猫が出て来て頭上でじゃれつき、子どもが起き上がると今度は白猫が出て来て、愛の二重唱を歌い始める。2 匹の猫は外に出たので子どもは猫を追って庭に出て行く。

月が輝く広い庭に出て安心する子ども。だが大きな木に寄りかかると「お前が今日盗んだナイフで、この腹につけた傷だよ…痛くて樹液が血のように流れている」と呻く。飛んできたトンボが子どもに迫り「恋人を返して」と言うが、針で壁に刺してしまったため子どもは何も言えない。そこに妻を殺されたこうもりが飛んできて、残されたヒナの話をして責める。籠から逃げ出したリスは雨蛙に対し速く逃げるよう促すが、雨蛙は「餌が来たら飛びかかり、捕まるが、逃げてまた戻って来る」と言う。子どもはリスに「籠の方がお前のすばしっこさ、きれいな目を見るのに良かった。そのために仕掛けたものだったのに」と話す。

多くの動物たちでいっぱいとなった庭。子どもは動物がそれぞれ仲良くし合っている様子を見て、次第に孤独感に襲われて「ママ!」と叫ぶ。すると動物たちや木が子どもに向かって一斉に襲いかかる。やがてただの乱闘騒ぎに発展し、1匹のリスが足に怪我をし、叫び声を上げて地面に倒れる。すると子どもは自分のリボンでリスの傷口を縛って介抱し、そのまま疲れて倒れてしまう。この様子を見た動物たちは静まり返り、口々に「彼は傷の手当てをした」と呟き、自分たちでは子どもを介抱できないと、皆で家の方に子どもを連れて行きながら、「ママ!」と大きな声で叫ぶ。

家の中が明るくなり、動物たちは子どもを置いて「彼はおりこうです。非常に優しくて、良い子です」と歌いながら去って行く。気が付いた子どもはそばにいる母親に手を差し伸べて「ママ!」と呼ぶ。そのまま静かに幕を閉じる。

そして参加者の皆さんも余韻のうち、静かに帰っていきました。

【講座の様子】